優秀賞

一郎さん

大阪府　上宮高等学校二年　吉元　一颯

八月十五日は終戦記念日。これまで学んだことから、僕は「戦争はしてはいけない」と考えているが、七十八回目を迎えた今年、その意識が大きく変わる出来事があった。

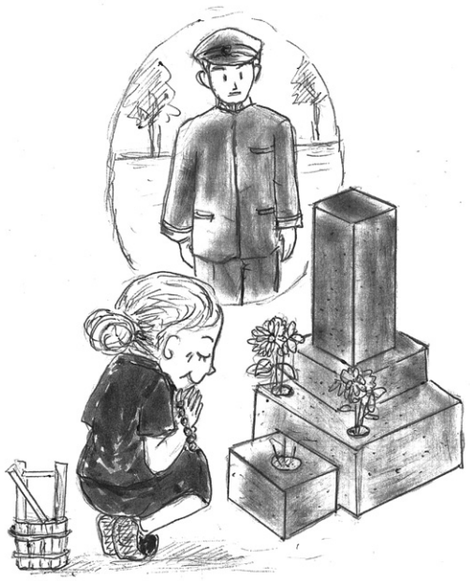
この春、七十一歳の祖母から聞いた、祖母の伯父の「一郎さん」の話だ。

「一郎さん」は、昭和二十年八月八日、終戦の一週間前、戦地に向かう船の中でアメリカ軍の魚雷を受け、船が沈没し、満十八歳と四ヶ月余の若さで戦死された。無事を信じていた家族のもとに「故一等兵山野一郎八月八日日本海にて戦死す」という短い電文が届いたのは、終戦から二ヶ月以上も後の十月末だった。遺骨も何もなく、戦没者のお墓にはお骨も何も入っておらず、幼い時から両親や祖父母と手を合わせてきた。きっと悲しみが深すぎて、私たちには何も語ることができなかったのだと思う。ところがこの春、実家の押し入れを片付けていた弟から、お仏壇の横の押し入れの奥から、古い新聞紙に包まれた「一郎さん」のお位牌と自筆の遺言状、戦死の電文、遺髪と遺爪、そして十八歳の詰襟姿の写真が出てきたと聞かされて驚いた。父や祖父母からは何も聞かされていなかっただけに、いかに父や祖父母の傷が深かったことかと胸が熱くなった。それぞれの紙は茶色く変色し、写真はセピア色になる、七十八年という長い年月を経て、私たちの目に触れたのは、きっと遺髪と遺爪をお墓に戻してほしいという魂の叫びに違いないと思った。

さらに、祖母は僕に、

「今、ロシアとウクライナで戦争をしているけど、敵味方は関係なく、それぞれの家族が亡くなり、悲しみに暮れる人たちがどんどんと増えていっている。かつての日本も同じ。おばあちゃんも戦争を知らない世代だけど、会ったこともない『一郎さん』だけれど、二度とこのような悲劇を繰り返してはいけない。戦争を知らない一颯にはピンと来ないかもしれないけど、『一郎さん』の出来事は伝えておきたい。」

と言った。そして、遺言状や電文、遺髪や遺爪、写真など、これらのことをまとめた資料を手渡してくれた。遺言状には「自分が戦死した時は、必ず元気を失うことなく、…親類の人々も、元気であとをたのみます」という、胸を打つ言葉がきれいな文字で書かれている。また、祖母は、神戸に戦没した船の資料館があることを調べ、資料館にも行き、「一郎さん」が乗船していた船「羅津丸」の記事と写真も手に入れた。敗戦前の小さな貨物船は、魚雷が命中してすぐに沈没したらしく、いったいどのような気持ちだったかと思うとたまらなくなる。七十八回目の「一郎さん」の命日の八月八日、祖母たちはご先祖のお墓に遺髪と遺爪を納め、やっと形あるものをお墓に納めることができ、手を合わせてほっとしたと言う。

「一郎さん」やご先祖も、どれだけほっとされたことだろう。戦死された「一郎さん」は当時今でいう高校三年生、僕とは一年しか年は変わらない。なかなか想像しても想像しきれないけれど、ウクライナとロシアの戦争とが重なり、戦争と平和について考えさせられる。そして昔のことを知った今僕たちは本当に恵まれているんだなとあらためて感じた。

僕は、高校で吹奏楽部に入り、練習はしんどいけれど、良い仲間にも恵まれ充実している。先輩たちは引退され、僕もあと一年、勉強との両立を楽しみながら、悔いのないように過ごしたいと思う。全く目が見えない祖母、普段は優しいけれど、して良いこととしてはいけないことの区別に関しては厳しい人である。今回の「一郎さん」の話も、祖母の行動力も、さすが、おばあちゃん感動したよ。しっかりと心に留めておくからね。